

実践報告

臨地実習施設の広域化に伴う学生への影響

滝沢美智子¹⁾

要旨

目的：多くの施設で展開している臨地実習が、学生にどのような影響をもたらすのかを明らかにし、今後の臨地実習のあり方を検討した。

対象と方法：調査期間は平成21年11月9日から11月24日、対象は本大学看護学部4年生で領域別実習終了直後の学生64名。自記式質問調査票を使用し、性別、居住環境、食生活、通学時間・それに関する影響、睡眠時間、学習時間、複数施設での実習に関する影響について調査した。

結果：有効回答率は62%であった。複数の施設にまたがった実習に関しては、良い影響を与えたと解答した学生は30名(81.1%)、どちらでもないと回答した学生は7名(18.9%)、悪い影響を与えたと解答した学生は一人もいなかった。実習中の通学時間は、最も遠い実習施設への通学に29名(77.3%)の学生が1時間から1時間半程度かかっていた。それに伴って通学時間が実習に悪い影響を与えたと解答した学生は13名(35.1%)で、全員が通学に60分以上時間がかかっていた。このことから、実習施設はある程度複数箇所、臨地実習施設までの通学時間は1時間以内の施設が望ましいと考える。

キーワード：臨地実習、実習施設、通学時間、睡眠時間、学生への影響

1. はじめに

大学卒業時に必要とされる看護実践能力の育成には、学内における講義・演習をはじめ、対象と直接に接することができる臨地実習が重要である。本大学は附属の実習施設を持たないことから、領域別実習に限っても38か所に分かれて実習を行っている。実習施設は規模や社会的役割も異なり、それぞれの理念によって運営されていることから施設における看護の方針や体制も様々である。

学生は実習ごとに施設が変わることで、環境に慣れるまでに時間がかかるばかりか、精神的にストレス状態に陥ると考えられる。先行研究においても「学生は臨地実習では学内授業時と比べ不安やストレスが増強していた」(近村ら、2007)、さらに「実習ストレスは実習を重ねた4年生が最も高かった」(宮崎ら、2008)と報告している。実習は学年を増すごとに増え、患者の状況が日々変化する中で、「学習が間

に合わない、記録に時間がかかり睡眠時間が少なくなるなど、身体的疲労もストレスの原因となる」(岩永、2007)。

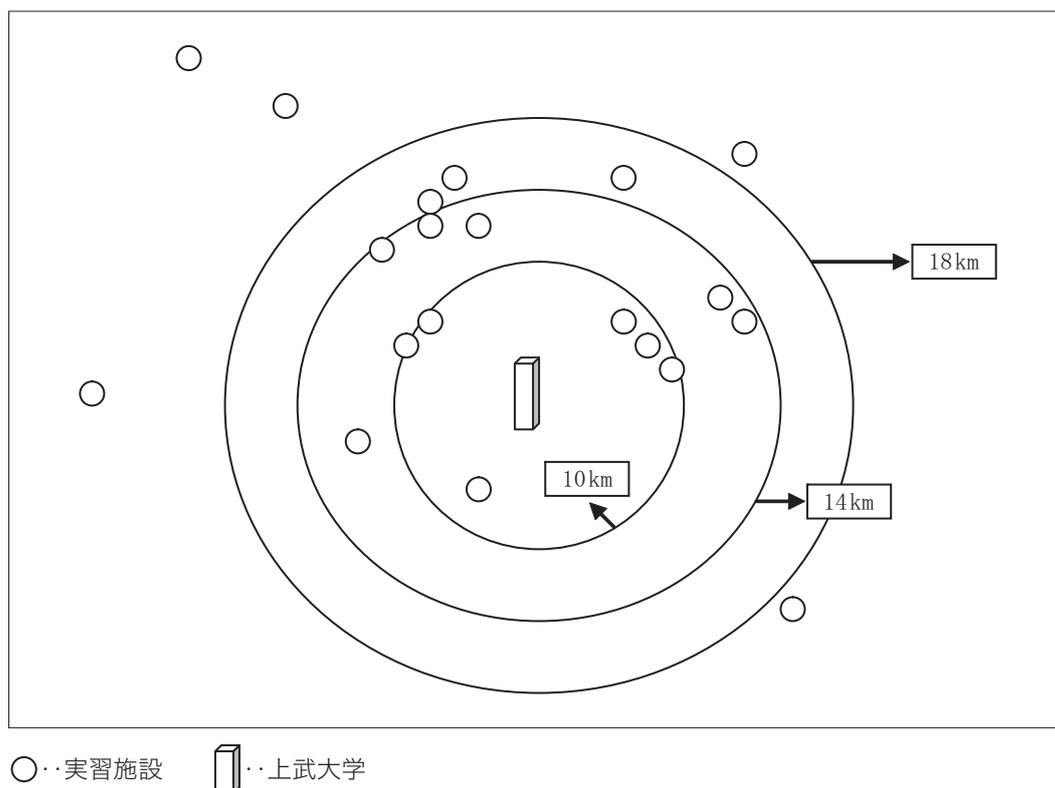
さらに臨地実習は、群馬県内や埼玉県の施設も使用しており、多くの施設は大学から遠く、ほとんどの施設は10Km以上離れている。また実習施設は、20Km以上離れている施設が3箇所あり、そのうち一箇所は30Km以上である。

実習に関する指導や実習施設の環境に関しては、今までアンケート調査を実施してきたが、実習施設が広範囲に及ぶことが学生にどのような影響をもたらしているのかに関しては、調査を実施してこなかった。

そこで本調査では、実習施設が遠くまた多くの施設で展開される実習が、学生にどのような影響をもたらすのかを明らかにし、今後の臨地実習のあり方を検討する。

1) 上武大学看護学部

図1. 実習施設の点在状況と大学からの距離の目安



II. 調査方法

1. 調査期間及び実習対象

平成21年11月9日から11月24日、対象は本大学看護学部4年生で領域別実習終了直後の学生64名であった。

2. 調査票

調査票は自記式質問調査票を使用し以下の内容で構成した。

- 1) 基本属性として、性別、居住環境
- 2) 生活状況として、実習期間中および実習期間以外の食生活、睡眠時間、学習時間
- 3) 通学時間および実習施設までの時間
- 4) 実習施設に慣れるまでの日数
- 5) 実習に与えた影響

下記の質問は3件法を用いさらに自由記載を併用した。

- ①通学時間が実習に与えた影響
- ②睡眠時間が実習に与えた影響
- ③実習と実習の間隔が実習に与えた影響
- ④複数の施設で行った実習が自分自身に与えた影響

3. 回収方法

2週間の回収期間を設け、回収ボックスへ個人で投函を依頼した。

4. 分析方法

統計ソフトSPSS12.0Jを用いて調査内容の項目ごとに基礎統計を行い、項目間の関連を調べるためにクロス集計を行った。

5. 倫理的配慮

調査に先立ち対象学生全員に対して、紙面及び口頭で調査の目的、および調査への協力は自由意志であり、調査に参加しなくても学業等への影響はないことを伝えた。尚、調査は上武大学倫理委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

1. 回収率および対象の基本的生活

64名中37名(男性8名、女性29名)から回答を得、有効回答率は62%であった。居住環境では、実家からの通学が18名(48.6%)、アパートからが19名(51.4%)であった。このうち実習にとまって実家

を離れてアパートを借りた学生は8名(21.6%)であった。実習中の食生活では、全て自炊と答えた学生が21名(56.8%)、自炊と外食両方と答えた学生が12名(32.4%)で、出来合いを買って自宅で食べる と答えた学生は4名(10.8%)であった。また食事回数は、実習に関係なく25名(67.6%)の学生が1日3食摂取していた。

睡眠は、実習中の睡眠時間は23名(62.1%)の学生が4～5時間、実習期間以外では30名(81.0%)の学生が6～7時間であった。

通学時間では、大学への通学時間は30分未満の学生が25名(66.3%)であるのに対して、実習中の通学時間は、最も遠い実習施設への通学に19名(51.3%)の学生が1時間以上かかっていた。また90

分以上かかる学生が11名(28.7%)であり、それらの学生について通学時間が実習に悪い影響を与えたと解答した学生は13名(35.1%)で、理由としては睡眠時間の短縮による疲労感で運転中に眠気に襲われたと解答している。学習時間では、実習中の学習時間は22名(59.4%)の学生が2～3時間に対し、実習期間以外では殆どしない、または1時間以内が21名(56.7%)であった。

2. 実習施設への通学時間が実習に与える影響

1) 通学時間と睡眠時間

実習施設への通学に90分以上かかった学生11名の睡眠時間は、5時間と答えた学生が最も多く5名、60分以上～90分かかかる学生19名中6名は、4時間が

表1. 生活と実習の状況

項 目		実習期間中	実習期間以外
通学時間	30分未満	0名	25名 (66.3%)
	30分～60分	7名 (18.9%)	6名 (16.2%)
	60分以上	19名 (51.3%)	1名 (2.7%)
	90分以上	10名 (26.0%)	4名 (10.8%)
	120分以上	1名 (2.7%)	1名 (2.7%)
睡眠時間	8時間以上	0名	5名 (13.5%)
	7時間	1名 (2.7%)	17名 (45.9%)
	6時間	8名 (21.6%)	13名 (35.1%)
	5時間	12名 (32.4%)	1名 (2.7%)
	4時間	11名 (29.7%)	1名 (2.7%)
	3時間	3名 (8.1%)	0名
	2時間	1名 (2.7%)	0名
	その他	1名 (2.7%)	0名
学習時間	殆どしない	1名 (2.7%)	10名 (27.0%)
	1時間	3名 (8.1%)	11名 (29.7%)
	2時間	8名 (21.6%)	6名 (16.2%)
	3時間	14名 (37.8%)	5名 (13.5%)
	4時間	5名 (13.5%)	1名 (2.7%)
	それ以上	6名 (16.2%)	4名 (10.8%)
実習施設に慣れるまでの期間	1日	1名 (2.7%)	
	2日	5名 (13.5%)	
	3日	16名 (43.2%)	
	4日	3名 (8.1%)	
	5日	8名 (21.6%)	
	その他	4名 (10.8%)	
複数の実習施設の影響	よい影響を与えた	30名 (81.1%)	
	悪い影響を与えた	0名	
	どちらでもない	7名 (18.9%)	

最も多かった。さらに30分以上～60分かかかる学生7名の睡眠時間では3名が6時間と解答していた。このことから必ずしも通学時間が長くなるほど睡眠時間が短縮されるとは言えなかった。

2) 通学時間と学習時間

通学時間と学習時間の関係では、通学に90分以上かかった学生11名の殆どが、3時間以上学習し、そのうち3名は4時間以上学習していた。通学に60分～80分程度かかる学生の学習時間は、殆ど学習しない学生から4時間以上学習する学生まで様々であった。30分～60分かかかる学生7名の学習時間は、1時間から4時間まで様々であった。

3) 通学時間が実習に与えた影響

通学時間が実習に悪い影響を与えたと回答した学生は、13名(35.1%)、良い影響を与えたと回答した学生は5名(13.5%)、どちらでもないと回答した学生が19名(51.4%)であった。このうち悪い影響を与えたと回答した学生全員が、通学に60分以上かかっていた。

3. 実習の間隔が実習に与えた影響

実習と実習の間隔が、実習に良い影響を与えたと解答した学生は7名(18.9%)、悪い影響を与えたと解答した学生は11名(29.7%)、どちらでもないは19名(51.4%)であった。自由記載では、実習間隔が短いことに関する影響よりも、8月に実習が終了した後、地域看護学実習が開始されるまで期間がしばらく空くことが問題であった。実習間隔の長い学生では前期実習が終了後地域看護学実習開始まで2ヶ月以上も期間が空く場合があり、実習に集中していた気持ちが、2ヶ月空くと切れてしまいモチベーションがあがらないと回答している。

4. 複数の施設で行う実習の影響

複数の施設にまたがった実習に関しては、良い影響を与えたと解答した学生は30名(81.1%)、どちらでもないと回答した学生は7名(18.9%)、悪い影響を与えたと解答した学生は一人もいなかった。学生は様々な施設を体験したことで多くの経験や学びにつながったと解答している。また実習環境に慣れるまでの期間は、5名(13.5%)の学生が2日、16名(43.2%)の学生が3日、8名(21.6%)の学生が5日、それ以上かかったと答えた学生が4名(10.8%)であった。

5. 学習時間

学習時間は実習期間以外では、10名(27%)の学生が殆ど学習しないと回答した。反面3時間以上学習していると回答した学生も10(27%)であった。実習期間中は、実習期間以外の学習時間に比べて学習時間が延びているが、ほとんど学習しないと答えた学生もいた。このうち4時間以上学習していると回答した学生が、6名(16.2%)、4時間の学生が5名13.5%、3時間の学生は14名(37.8%)、2時間の学生は8名(21.6%)、1時間以内と解答した学生は4名(10.8%)いた。しかし実習期間以外では殆ど学習しなかった学生でも、その内半数は実習になると3時間以上学習していた。

IV. 考察

1. 複数の施設で行う実習の影響

領域別実習では、38箇所の実習施設で実習を展開しており、各々の学生は約6ヶ月に亘って十数か所で実習を行っている。多くの実習施設で行われる実習は、環境に慣れるまでに時間がかかり、8名(21.6%)の学生は施設に慣れるまでに5日かかったと答え、それ以上かかったと答えた学生は4名(10.8%)であった。1領域での実習期間は長くて4週間、短い実習では1週間である。慣れるまでに1週間かかる学生は、慣れたところにまた次の施設に移ることも多い。新たな施設では新たな人間関係を形成しなければならない上に、担当教員が非常勤の場合もあり、本来相談相手となるべき教員とも関係を形成しなければならない現状がある。先行研究において「教員や実習指導者との関わりが、学生のストレスに関係していた」(小笠原ら, 2010)と報告している。新たな実習環境に少しでも早く適応するためには、指導教員の役割も大きいといえる。しかしそれでも学生は、複数の施設で実習を行うことに意義を感じており、複数の実習施設での経験や学びは学生にとって良い影響を与え、悪い影響を与えたと答えた学生は一人もいなかった。このことから、実習施設は、あえて1箇所に限定する必要はないが、学生個々が数箇所の施設で実習ができるような実習施設の限定は必要であると考えられる。

2. 実習と実習の間隔が学生に与える影響

領域別実習は期間を挟まず次々に展開される。1つの実習が終了すると週末を挿んですぐに次の実習

が開始され、非常にあわただしい実習であるが、学生の25名(70.3%)はこの実習展開が悪い影響を与えなかったと解答している。自由記載では、実習当初は大変であると感じていても、実習の経過とともに実習に身体が慣れてきた。また間隔を置かなかったことで実習に集中できたと答えている。悪い影響を与えたと答えた学生の意見では、前期の実習終了後から地域看護学実習開始までの期間が長かったことで、実習に対する集中力が切れてしまった。モチベーションが低下して実習に集中できなかったといった意見があった。調査前には、実習と実習の間に休みがないことで、学生に疲労感を与え、やる気を低下させているのではないかと推測したが、今回の調査結果は、予測と逆の結果となった。このことから新カリキュラムでは、地域看護学実習のスケジュールを検討する必要があると考える。

3. 実習施設への通学時間が実習に与える影響

実習施設への通学時間では、90分以上かかった学生が11名(29.7%)おり、このうち自分で車を運転する学生の多くが、運転中に睡魔に襲われることがあったと回答し、実際に事故を起こした学生もいた。また24名(64.8%)の学生が大学への通学時間が、30分未満であり、日頃の通学時間に比べて実習施設への通学時間が長くなったことも関連があると推察される。

実習期間中は、普段の睡眠時間と比べて睡眠時間が短くなり、23名(62.1%)の学生が4~5時間と解答している。実習期間以外では、35名(94.5%)の学生が6時間以上睡眠をとっていることから、睡眠時間の短縮が運転中の眠気に関係があると推察される。また通学時間が実習に悪い影響を与えたと解答した学生全員が、通学に60分以上かかっていたことから、学生の日頃の生活を考えると60分以内で通学が可能な施設や公共交通機関が利用しやすい施設が実習では望ましいといえる。

4. 自己学習時間の変化

学習時間に関して今回の調査では、実習期間以外では27%(10名)の学生が殆ど学習しないと回答した。反面3時間以上学習していると回答した学生も27%であった。実習では、学生の学習能力の格差が指摘されており、日ごろの学習時間も関連があると推察される。また実習中の学習時間では、2~3時間

学習している学生が最も多く、6名(16.2%)の学生は4時間以上学習していた。しかしなかには1時間~殆どしないと答えた学生もいた。学習時間だけでは学習内容の把握はできないが、1時間程度の学習時間では、必要な記録の整理や受け持ち患者の情報分析、関係資料による学習などは行えない可能性が高いと考える。

今回の調査では学習時間は、施設への通学時間と無関係であった。また睡眠時間の長短とも関係がなかった。このことから、自宅で学習する・しないは、本人の意思によるところが大きいと考える。

食生活では、「実習中の食事の乱れが、実習中のストレスや疲労等に関係がある」(三井, 2008)との報告もあるが、本学の学生は、食事に関しては、実習中も実習期間以外と殆ど変化がなく21名(56.8%)の学生は3食自炊をしており、25名(67.6%)の学生が3食摂取していたことから、日頃の自炊習慣を実習中も継続している学生が多いことがわかった。しかし実習中に体調不良で欠席する学生もいることから、これらの学生に関して、食生活を含めた生活状況の把握が必要である。

V. 結語

本調査では、多くの施設で展開される実習体制が、学生にどのような影響をもたらすのかを明らかにし、今後の臨地実習のあり方を検討した。

1. 複数の施設にまたがった実習は、学生の経験や学びに良い影響を与えていた。このことから実習施設はある程度複数箇所経験することで学生は、変わることに伴うストレス以上に学びを深めていた。
2. 実習中の通学時間は、最も遠い実習施設への通学に1時間~1時間半程度かかり、通学時間が実習に悪い影響を与えたと回答した学生全員が通学に60分以上かかっていた。
3. 臨地実習施設までの通学時間は1時間以内の施設が望ましい。
4. 実習と実習の間隔は、詰まっていることに対する影響は少なく、むしろ間隔が大きく空いてしまうことが問題であった。間隔が空くことで実習に対する集中力が切れ、モチベーションが低下する傾向にあり、実習スケジュールの検討が必要であると考えられる。

文献

- 岩永喜久子(2007)：4年生大学看護学生のメンタルヘルスに関する臨地実習と日常生活要因，日本看護学会論文集看護教育37号 P24-26.
- 小笠原知枝，吉岡さおり，山本洋美，他4名(2007)：看護学生の臨床学習環境とストレスコーピングに関する実態調査，広島国際大学看護学ジャーナル，7巻1号P3-13.
- 近村千穂，石崎文子，小山 矩，他3名(2007)：看護臨床実習におけるストレス状況と性格との関連，県立広島大学保健福祉学部誌 7(1) P187-196.
- 三井美恵子(2008)：臨地実習中の健康問題とその要因，東京厚生年金看護専門学校紀要，10巻1号 P59-68.
- 宮崎晴佳，増本紘子，岩永喜久子(2008)：看護学生の臨地実習におけるストレスと対処行動，日本看護学会論文集 38号 P48-50.